

若い人たちは待っている



大垣眞一郎
論説委員
東京大学大学院教授

最近のマスメディア等に、時々、日本の若い世代あるいは学生の内向き志向を危惧する議論が載る。国際的な課題に興味を示さない、日常的な個人の小さな生活に埋没している等である。しかし、私の関連分野、環境工学、都市工学、あるいは、社会基盤工学分野の大学生、院生は、国際的な仕事に興味を持つ学生が少なくない。「近頃の若い者は」式の十把ひとからげの論は、いつの時代も誤りである。

専門分野や就職先を選ぶとき、学生の志向にはいろいろなものがある。工学分野の狭い見聞の限りではあるが、科学的真理を究めたい、不思議なことを解明したい、新しいものを作りたい、美しいものを作りたい、実業の世界で活躍をしたい、国と社会を動かしたい、などに加えて、世界の現在と将来の課題解決に貢献したい、と思う学生がいる。特に、環境あるいは生活基盤の課題に興味のある学生は、地球環境分野に限らず、はじめからごく自然に、課題を世界のなかに置く。幼い頃から潤沢な消費生活の中で育った世代であるからこそ、世界の資源の有限性を直感的に感じているためかもしれない。また、国境という概念はほとんど意識にないようにも見える。

いまの大学では、大学院での研究の成果はごく普通に国際会議で発表する。国際学術誌に英文論文を出すのは当然である。学内には各国の留学生が大勢いる。言うまでもなく研究情報は電子的に一瞬にして世界中と交換できる。このように、専門研究分野での世界化あるいは地球化は日常茶飯である。学部レベルのコース名に、「国際プロジェクト」を打ち出している東京大学工学部社会基盤学科の例もある。このような学生達にとって、土木関連の職業分野は充分魅力的に映るであろうか。

社会的共通資本整備はいつの時代も、どのような社会経済発展段階でも、重要な仕事であり、どの国でも必要である。もちろん、まず日本の国土の課題を解決することが日本国にとって必要であり、国内の社会基盤の更新、少子高齢化社会への対策、低炭素社会の設計などへ向けて、国政、地方行政、企業は活発な活動を展開している。しかし、国内の課題解決の重要性を強調しすぎると、土木あるいは社会基盤に関する分野は国内のみを向いている、と若い人に印象づけてしまう心配がある。世界で働きたい若い人は、この職業分野では自分の将来が狭くなる、と誤解するのではないか。

国外の社会基盤整備は、国内と異なり、事業推進上の多くのリスクがあり、複雑でより困難な仕事である。また、

例えば日本の水道や下水道などは公営企業であり、国際展開は制度的な縛りもある。しかし、土木分野全体が、世界の課題に関わり、解決に貢献しているという姿と印象が打ち出されていないければ、職業分野としての魅力は低くなるであろう。民営か公営かではなくさまざまな解があるはずである。世界的金融危機、経済危機の中で、改めて実体経済と実生活を支える公共財の価値の重要性が世界中で強調されている。長期的視点から見ると、いまほど社会的共通資本整備への投資が必要な時期はなく、まさに日本の公共財産の技術と運営能力の蓄積を世界に展開する好機である。

いまの日本の若い世代も、かつての時代の青年達と同じく、あるいはより現実的に世界での活躍の希望を持っている。日本の社会のさまざまな分野の中で、社会資本整備に関わる分野の行政や産業界など全体のシステムが、世界に雄飛しようとする若い世代へ、その大きな受け皿を提供しなければならない。

幸い、水に関わる分野では、先月2009年1月に、政産官学の連携を強化する、特に国際的展開への連携も視野に入れた、「水の安全保障戦略機構」が発足した。その同じ1月、産業界の中で、有限責任事業組合（LLP）「海外水環境システム協議会」も設立された。各省も国際展開の新しい仕組みを作り始めている。もちろん水の分野でも、既に多くの企業が海外展開しているし、ODAも多くの実績がある。しかし、国際を視野に入れたままでない新しい仕組みが発足したのは画期的である。加えて、世界の若い人たち、特にアジア地域の学生の受け皿としても発展すべきであろう。

東南アジア共同体の話題が出てから久しいが、社会基盤分野の人の交流と教育、職業提供からまず進めてはどうだろうか。土木分野を含む工学分野の大学院教育のアジア地域相互教育システムが、JICAとASEAN諸国の大学ネットワークとの連携の下、順調に進んでいる。また、科学技術外交の一環として、地球規模課題対応国際科学技術協力事業（(独) JICA の ODA 予算と (独) 科学技術振興機構の科学技術予算の連携公募型予算）も 2008 年度より始まった。日本政府が永年支援してきたアジア工科大学（A I T）も国際機関としての自立を果たした。これらは、国際展開の将来への布石となるであろう。

活躍の場が世界に広がることを、若い人たちは待っている。